

後期：アジアのキリスト教思想**A. 日本のキリスト教思想**

1. 植村正久 2. 海老名弾正 3. 内村鑑三 4. 内村鑑三と無教会
5. 京都学派とキリスト教思想

B. 研究発表**C. アジアのキリスト教思想**

9. 韓国キリスト教 10. 民衆神学 11. 中国キリスト教 12. キリスト教と土着化論
13. インドのキリスト教アシュラム 1/8 14. ピエリスの解放の神学 1/15
15. インドネシアのキリスト教 1/22

<前回>民衆神学**(1) 民衆神学の意義**

「先立つ「黄色人種の神学」のように、民衆の神学は文化的・土着的に形成された神学ではなく、韓国において苦しんでいる民衆の文脈的神学であり、それゆえイエスによって祝福された全世界の神の国の民にとって開かれている。人権と公民権のための闘いと結びつけられ、キリスト者たちを「教会の民」から「民衆の信仰共同体」にする限りにおいて、民衆の神学は、韓国における最初の政治神学でもある。」(モルトマン、312)

(2) 発端あるいは文脈

「軍事独裁政権」「このような韓国的な背景の下で台頭した神学が「民衆神学」である。もちろんこれは、当時世界の神学界において流行していた政治的、社会的、経済的な差別に抗議する「疎外された者の観点から見る神学」、すなわち「解放の神学」、「黒人の神学」、「フェミニスト神学」などのパラダイムと軌を一にするものであり、相互に影響を与え合ったことは明らかである。しかし、「民衆神学」は韓国的な状況という独自の背景を前提にしなければ、想定し難い独自の目標と方式をもつ神学体系である。したがって「民衆神学」は、時代状況から離れては、その神学理論と実践目標について議論することができないという徹底した状況神学なのである。」(徐正敏『韓国キリスト教史概論——その出会いと葛藤』かんよう出版、2012年、93-94頁)

(3) 韓国民衆史の中で

・「韓国における民衆と神学——アジア神学協議会についての伝記的報告」(徐洸善)

「彼が試みているのは、まず最初にその文学、感情、演劇等に現われている民衆の社会的伝記を読み、そこから民衆の歴史の動態を描き出すことである。」(李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編『民衆の神学』教文館、1984年、32)

「七〇年代の韓国の民衆史の事件の「現場」に帰って、そこに両足をしっかりと立ち、「民衆神学とは何か」を熟考しなければならない。そうせずしては、七〇年代の韓国民衆史の心臓部に根ざしたキリスト教神学の一株の青い木である「民衆神学」の生命性を、しっかりと把握することはできない。」(朴聖煥『民衆神学の形成と展開——一九七〇年代を中心に』新教出版社、1997年、6頁)

(4) 聖書の文脈で

「神学の「問い」が変わる。これは「民衆の目で」見るということと同じである。すなわち、視座が変わるのである。その問いが聖書の中に解答を求め、聖書の「民衆」(オクロス)を発見するようになり、そのオクロスの現実と今日の民衆の現実が共鳴を起こし、伝統的な答えとはまったく異なる「答え」を得るようになった。この場合、「問い」は民衆の問いであり、「答え」も民衆の答えである。」(108)

・「問いと答え」の思考構造、神学思想の解釈学的構造。

「福音書のなかでイエスは、ただ「イエス民衆」としてのみ存在する。だから「イエス民衆」はイエスの別の名前だ。ここで、西洋神学の「イエス」と「民衆」という「主客図式」は立場を失う。」(107)

(5) 二つの物語の合流

「金芝河の民衆神学」『張日譚』の構想メモ」(308)

「韓国で二つの物語が合流した一つの模範的事例として金芝河の「張一譚」の物語を取り上げている徐南同は、その神学的意味をこのように述べている。「張一譚」の会報の福音は神学の土着化を決定的な課題とする。金芝河はイエスの物語である福音書と民衆の恨の物語であるパンソリを結合しようとするものである。そうして韓国的、民衆の神学を形成してみようとする。パンソリの辞説である「張一譚」の物語は、イエスの話の記録である「ヨハネ福音書」の進行と似ている。」(250)

(6) 民衆の神学と日韓の交流

日本の聖書学研究の分野では、民衆の神学との交流が見られる。

(7) 民衆神学のその後、民衆神学は終わったのか

・状況的文脈の神学は、その状況の変化によって、本質的な壁に直面する。90年代以降の韓国社会のどこに民衆が存在するか。

しかし、状況的神学が「神学」として存立するには、それが状況に還元されない超越的意味の次元を具体化することが必要だったのではなかったのか。実は、民衆は新しい文脈のどこにでも存在する。神学は新たな合流を求めている。

・解放と土着化とは、一つのプロセスの二つの契機ではなかったか。

↓

普遍と特殊の関連性を問い直す作業が必要である。

C. アジアのキリスト教思想

11. 中国キリスト教

(1) 歴史的概観と現状

1. 唐代(7世紀、大秦景教流行中国碑)より元代にわたる景教の伝道
2. 元代に始まるカトリック伝道。特に明末よりのイエズス会の宣教は、西欧文化の導入を伴い中国文化に大きな影響を及ぼしたが、典礼問題によって清朝によって19世紀前半まで布教が禁止された(1723年)。

モンテ・コルビーノ(1294年、大都到着から30年あまり)

マテオ・リッチ(1582年、マカオ到着)

3. 清末に始まったプロテスタント伝道。19世紀前半まではカトリックと共に禁教下での秘密伝道であったが(モリソン、1807年広州到着)、アロー号戦争(第二次アヘン戦争)の結果、天津条約(1858)・北京条約(1860)によってキリスト教の布教が公認。

太平天国の乱(1851-1864)、義和団事件(1900)

4. 20世紀以降の現代中国におけるキリスト教。中国の民族的自覚に伴って反キリスト教運動も激化し、それに対応する仕方、キリスト教の土着化運動が漸進的に進められてきている。

5. 中華人民共和国以降、文化大革命から改革開放路線へ。

三自愛国教会と家庭教会(地下教会)、文化キリスト教

キリスト教の急速な発展

6. 丁光訓ほか『中国のキリスト者はかく信ず』新教新書、1984年。

「要道問答」

ディン・グワンシュン

問 78: キリスト者は自分の祖国を熱愛すべきですか。

答: そうです。旧約の先覚者、詩篇の作者はみな自分の祖国と民族に対して非常に深い愛情をもっていました。・・・いわんや自分の骨肉同胞、自分の民族と祖国においておやです。

問 79: キリスト者はどのように国家の法律に対するべきですか。

問 80: キリスト者は上にあつて政権をとっている人々にいかに対するべきですか。

ローマ 13・1-5

問 81: どのようにキリストにある自由を理解すべきでしょうか。

(2) 本色化と三自愛国論

7. 本色運動 (1920 年代) から三自愛国論 (1950 年代以降) へ

8. 20 世紀初頭以降のキリスト教伝道の発展 (キリスト教主義学校の発展) と反キリスト教運動。

「一九二〇年代の学生を主体とする反キリスト教運動は、それ以前の反キリスト教運動、すなわち清朝末期の教案や義和団の乱とは、全く性格の異なったものである。一九二〇年代の場合は、五・四運動以降急激に変動してゆく中国の複雑な歴史を背景としている。一九二二年四月、精華大学において世界基督教学生連盟の会議が開かれたが、この予告が『青年進歩』(基督教青年会雑誌) 二月号に掲載されると、上海の一部の学生達は三月九日「非基督教学生連盟」の組織を宣言して全国に呼びかけ、右の世界基督教学生連盟会議開催に反対した。・・・この運動は上海、北京以外の地まで進展し、広東・南京・杭州その他の地方に反キリスト教団体が組織された。主体は大部分学生であったが、広東では二七人の労働者も加わり、社会主義青年団の第一回総会 (五月) では右の反宗教・反キリスト教を主旨とする諸団体を支持することを決議した。・・・単なる学生運動ではなく、政党や文化団体にも協力者を得て発展し、・・・一九二七年夏には殆んどの全部の宣教師が任地を去って上海または東京に避難し、そのまま帰国した人もあった。」(山本、89-90頁)

「一九二二年に起こる反キリスト教運動の先駆を為したのは、一九一五年頃から活発になった新文化運動であるといつてよい。」「陳独秀」「『新青年』の発刊 (一九一五年)」(91)、「反キリスト教運動を進展させる大きな力となったものにナショナリズムがある」(94)、「一九二二年から一九二七年まで続いた反キリスト教運動は、まず共産主義の影響下に起こると共に、科学を主眼とする新思想と結びついて進展し、一九二四年以降、教育権回収運動・反帝国主義運動を中心とするナショナリズムによって促進されたもので、その背後には絶えず共産主義の影響が認められる」(106)。

↓

キリスト教会に対応を迫る。

1927 年「中華基督教会」の成立、キリスト教中国化運動の発展

本色教会：「中国教会の成長の過程において、一九一〇年代に始まった教会の自立と合同の運動には、経済的・政治的自立のみならず、思想面での自立やキリスト教の中国化の問題も含まれており、それが「本色教会」運動に発展したこと」(117)

9. キリスト教宣教運動論の展開と三自思想

以下、徐亦猛「中国におけるキリスト教本色化運動——西洋宣教師の動向についての考察——」(現代キリスト教思想研究会『アジア・キリスト教・多元性』第7号、2009年)に基づく。

- ・近代キリスト教海外宣教運動：広範な地域に関わる世界的運動。アジアやアフリカなど西洋のキリスト教世界以外の地域は西洋教会の福音開拓の場となった。

- ・宣教師たちが中国で遭遇した問題や困難は、他の地域においても発生。

宣教運動の規模の拡大と共に、西洋ミッションの経済的負担もかなり大きくなった。

本色教会が経済面において西洋ミッションに頼らないで教会の自養を実現する直接原因。

- ・ヘンリ・ヴェン (Henry Venn、アフリカにおける英国聖公会の宣教師)：1841 年、本色化教会の自治(self-governing)・自養(self-supporting)・自伝(self-extension)という考えを最初に提起した。自養、自治、自伝という「三自」の宣教理論を構築した。

- ・1860 年リバプール宣教大会：多くの参加者はヴェンの「三自」の宣教理論を賛同。

- ・ルーファス・アンダーソン (Rufus Anderson、米国公理会 (ABCFM) の宣教機構責任者)：ヴェンと類似する観点を発表 (1841 年 ABCFM の年度報告)。「(現地人の叙任式に関して) このようにして、福音はまもなく現地で土着化し、福音施設は神の恩寵を通じて自立と自伝のエネルギーを獲得した」、「現地の伝道教会に関しては、以下の問いが出

てくるであろう。こうした教会はどこまでこの国のすべての団体の権限から独立すべきであるか、自養と自立に向けてどのように訓練されるべきか。・・・宣教師が教えるべきことと伝道教会の性格に関して、ABCFMの責任は何か」。

・1900年、ニューヨークで開かれた宣教大会において、本色化教会の自養の問題は主題として取り上げられ積極的に討論された。「宣教資金は宣教師自身の伝道活動に限って使う、現地の信徒に教会の経済を負担するように最初から教える、現地教会の自養を実現させる」。

・エディンバラ世界宣教会議（1910年6月）。全世界の宣教団体は現地の教会の自養の実現を宣教の基本原則として認識。宣教活動の重要課題とは、「どこにおいても、人間の心に対してキリストが彼らの救い主だと説くこと」と同時に、現地教会に教会を建て、指導者を育て、その教会が「三自」を達成できるよう導くこと。

・1912年から1913年にかけて、エディンバラ継続委員会の議長J.R.モットが中国、日本、インドなどアジア各地を訪問し、宣教師と、現地のキリスト教者の両者の参与による宣教会議を相次いで開催。→各国キリスト教協議会（National Christian Council: NCC）が設立。

10. キリスト教と中国文化（儒教） → ナショナリズム

11. キリスト教と共産主義 → 社会改革、科学・近代思想

武藤一雄『宗教哲学』日本YMCA同盟出版、1955年。

第一章 宗教とマルクス主義

第二章 ニヒリズムと宗教

第三章 神学と宗教哲学

（3）本色化運動の思想家たち

詳細は、山本、徐の研究を参照。

12. 呉雷川（中国のキリスト教教育者。清朝末の高官、1915年に中華聖公会で受洗、晩年燕京大学の学長。「高い儒教の教養をもち、豊富な古典の知識を駆使しながらキリスト教に関する多くの著述を行っている」山本、211）

・『基督教与中国文化』（1936）：

・「欧米のキリスト教批判」「マルクス主義とキリスト教との共通点」

・「中華民族の復興に最も必要であるものはよき指導者であり、キリスト教こそ、よき指導者をつくるために必要である強調」「呉雷川の主眼は、現代から将来に向って、キリスト教が中国に於て如何なる役割、如何なる貢献をなし得るか、という点にある」（213）

・社会変革者キリスト

「イエスの生涯の宣教活動の目的は社会改革であったという見解」、「イエスの最初の計画は、一つには全民族のキリストに対する希望に应付することであり、また一つには新社会を建立する自己の根本的な主張を貫徹しようとするのであった」

「イエスの理想の「天国」とは即ち「改造を経過した新しい社会」」（217）

・「欧米伝統のキリスト教思想では、個人の問題のみを重視して社会の問題を強調しない」（219）、「個人の内的革新は社会改革の完遂を目的としてなされるべきであるという考え方」「究極の目的は社会改革」「西欧伝統のキリスト教思想の如く、個人の改新こそが重要であり、その結果として社会が改革されるという考え方とは、個人と社会との関係が逆になっている」（221）

・「中郷思想との融合」

「新約聖書の言うところの聖霊は、儒書にいう仁である」（226）、「多くの類似点」（230）

「呉雷川の説明する態度は、中国人には奇異にみえる聖書の記述が、儒教の經典の句によって説明すればよく理解される、との考え方に基づいているようである。・・・おそらく哲学的宗教的に深く考えて、人間の心を支配する真理の奥に、この二つに共通のものがある、とみたのではないであろうか。」（230）

13. 誠静怡（1881-1939：倫敦会教会の牧師、神学博士。1910年のエディンバラ世界宣教会議の中国代表、1927年設立の中華基督教会の初代総裁）：

- ・「本色」：「元来、生まれながらの血筋・家柄・素性や、土着のものを意味することば」、「中国的な」「中国固有の」「中国人の」等の意味と考えてよい」（263）
- ・「本色教会之商榷」（『文社月刊』創刊号、1925年10月）。

伝来から現在までの中国キリスト教界の発展を五つの時期に分けて説明。

「私が提唱する本色教会は」「二つの意味を含んでいる」、「(1)東洋におけるキリスト教として、いかに東洋人の「需要」に適合させるか、キリスト教の諸活動を、いかに東洋の習俗・環境・歴史・思想と融合させ、数千年の結晶の文化に、人の心に、深く入り込ませるか、ということである。(2)教会の一切の事を、中国信徒の負担責任とすることである」（267）、「(1)キリスト教と中国文化の融合、(2)中国教会の自立」（269）

・「東と西との信仰は、原質は一つである。ただその信仰の表示は同一ではない」、「本色」といっても、キリスト教の本質が変わるのではなくして、その信仰の表現がそれぞれの民族らしい特徴をもつという考え方である。」（268）

「キリスト教と中国文化との融合は、中国文化にとってもキリスト教にとっても、新しい発展となり、未来の新しい中国文化・東洋文化ができ、同時に世界のキリスト教会に貢献できる」（280）

・「多くの中国キリスト教指導者が、教派主義はキリスト教本来のものではなくして、西洋文化の要素であるが故に排除すべきだとしている。」（285）、「西洋伝来のキリスト教を無批判に受け入れずに、その中のキリスト教の真髄を受容すべきだとする考え方」（287）、「今日のように自由主義と保守主義との論争の時代には、中国人キリスト教徒はどうしてもキリストに帰り、聖書に帰らざるを得ないのです。」（288）

<参考文献>

1. 吉田寅「第四節 中国」（日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』1991年）
2. 山本澄子『中国キリスト教史研究』山川出版社、2006年（東京大学出版会、1972年）
3. 富坂キリスト教センター編『原典・現代キリスト教資料集——プロテスタント教会と中国政府の重要文献 1950-2000』新教出版社、2008年。
4. 王艾明『王道——21世紀中国の協会と市民社会のための神学』新教出版社、2012年。
5. 徐亦猛
「中国におけるキリスト教本色化運動——西洋宣教師の動向についての考察——」（現代キリスト教思想研究会『アジア・キリスト教・多元性』第7号、2009年）
「中国におけるキリスト教本色化運動—誠静怡についての考察—」（2008年）
「中国におけるキリスト教本色化運動—呉耀宗の思想の考察—」（2007年）
「中国における本色化（土着化）運動の先駆者呉雷川」（2006年）
6. ハンス・キューング、ジュリア・チン『中国宗教とキリスト教の対話』刀水書房、2005年。